

大河ドラマ『南海道の晴嵐』を期して（二七四）

文・出水 康生

# 戦国おもしろ百話

## 三好・織田・豊臣・徳川時代に生きる横田内膳正村詮

阿波岩倉・和泉岸和田・近江水口・駿河駿府・伯耆米子への変転（六）

### 三好氏から織田氏へ

最初の戦国天下人三好長慶が永禄七（一五六四）年七月四日に飯盛山城（大東市・四條畷市）で病死して、数年間に十河一存・三好美休・安宅冬康の兄弟、嫡子の義興の死去と相まって三好政権が揺らぎ、その威勢が衰亡する。

三好長慶の後を義継が嗣ぎ、三好長逸・三好政康・岩成友通の三好三人衆が補佐し、松永久秀と共に勢力維持を図った。永



大阪市福島区の玉川四丁目交差点の野田城跡碑



極楽寺の門前の野田城跡碑



石山本願寺に対応した極楽寺門前の證如上人の石碑



野田・福島合戦当時の湿地デルタ地帯の状況



康長の大坂の陣の頃の野田・福島地形図

禄八年五月に三好三人衆・松永久通勢が將軍足利義輝を弑逆し、阿波公方の足利義昭の擁立を阿波三好勢の篠原長房と三人衆が図ったが、松永久秀と対立し、抗争が展開される。ようやくに將軍宣下を受けて第十四代將軍に就任したのは永禄十一（一五六八）年二月八日であった。その過程の混乱に応じて、足利義栄と従兄弟の關係にあった足利義昭を奉じて織田信長がその年の九月に上洛し、三好氏に代わって「天下布武」を図る。京畿

### 野田・福島合戦

信長の天下布武に抵抗した三好勢の最後の合戦が野田・福島合戦である。元亀元（一五七〇）年八月開戦、年末に天皇の

和議仲介で終わるが、野田・福島合戦がそれ以後一〇年に渡る石山合戦の最初となる。野田・福島は大阪市福島区で、野田城跡碑が建てられている。当時は低湿なデルタ地帯であった。三好三人衆が微高地に築城して、地の利を活かして戦う。三好勢は三人衆に三好康長・安宅信康・十河存保に細川信良（昭元）・斎藤龍興、そして阿波からの細川真之・三好長治・篠原長房軍が加わり、それに紀伊の雑賀鉄砲衆を率いる雑賀孫一（鈴木重秀）が加わる。織田勢は織田信長・足利義昭・細川藤賢・和田惟政に信長に属した三好義継・松永久秀・久通、そして紀伊の根来衆と分裂して信長に属した雑賀衆が加わる。この野田・福島合戦は野戦よりも根来・雑賀衆の鉄砲合戦が行われた。『信長公記』の巻三「野田・福島御

陣の事」に「野田・福島十町ばかり北に、海老江と申す在所候。公方様・信長公、御一所に詰め陣に御陣をすえさせられ先陣は勿論、夜々に土手を築き、その手その手を争ひ、堀際へ詰め寄せ、その数を尽し、城楼を上げ、大鉄砲にて城中へ打ち入れ、責られ候。根来・雑賀・湯川・紀伊国奥郡衆二万ばかり罷り立ち、遠里小野・住吉・天王寺に陣取り候。鉄砲三千挺これある由に候。毎日参陣候と、攻められ候。御敵身方の鉄砲、誠に日夜天地も響くばかりに候。然れば、野田・福島種々懇望致し、無事の儀申し扱ひ候と雖も、迎も程あるべからずの間、攻め干さるべき由候と、ご御容これなく、野田・福島落去候はば大坂滅亡の儀と存知候歟。」と織田方の目で記録される。

このように鉄砲三千挺・大鉄砲、日夜天地も響くばかり、根

来・雑賀・湯川・紀伊国奥郡衆二万ばかり罷り立ち、と記録されるのが驚異のことである。

「大坂滅亡の儀と存じ候か」とは石山本願寺が、野田・福島で三好勢が敗北すれば、信長が次の標的として攻めて来ることを危惧して、顕如法主の命令によつて「本願寺の鐘」が打ち鳴らされ、門徒一揆の総力を上げて三好勢を応援し、反信長の旗幟を明白として信長包圍網の中心に位置することになる。三好長慶

が天下人に飛翔する契機となつた武門（細川晴元）と本願寺（証如光教法主）の講和仲介以来に三好氏と本願寺の關係は濃密で良好であった。野田・福島合戦での信長との講和に大きな役割を果たした篠原長房は法主と縁者の女性を正室としていた。

## 石山合戦の十年

一五七〇～八〇年の石山合戦



足利義昭・織田信長が布陣した天満神社の現在

の十年は日本史上の有名事件が山積する。野田・福島合戦での三好勢の最後の抵抗で阿波・讃岐・淡路（ASAトライアングル）を本拠とした三好長慶・戦国三好一族の「環大阪湾政権」が終末となる。

阿波公方足利義榮と従兄弟である足利義昭を奉じて織田信長が上洛をして三好氏の「理世安民」の旗幟に代わって「天下布武」を京畿に立てる。足利義昭と織田信長の蜜月は長続きせず、義昭將軍が全国各地の大名に「御内書」を發布して石山本願寺を中心とする信長包圍網を形成する。その御内書の檄に応じて武田信玄が甲斐より上洛軍を起し三方原で徳川家康を一蹴して一気に上洛するかに見えた。その威勢に応じて松永久秀が包圍網を離れて多聞山城に帰城したが、信玄が途中で死去して期待が裏切られて久秀が多聞山城と



野田・福島の合戦の時に三好康長ら一族が野田藤歌を詠んだ野田藤神社の現在

不動国行の名刀を献上して雌伏する。時を同じくして、信長と講和した後に阿波に帰国した篠原長房が三好長治勢と傭兵の雑賀鉄砲衆によつて上桜城（吉野川市川島町）で天正三年七月に悲惨な討死をする。その時に岩倉城の横田内膳が初陣したかとされ、堺の妙国寺で日珥上人に二〇歳で帰依して史上に登場する。武田信玄の上洛に応じて足利義昭將軍が信長から離反して槇島城に籠城する。激怒した信長が槇島城を攻め、義昭が妹婿である三好義継を頼つて若江城に入城し、その後に紀伊の由良興国寺に脱出し、毛利氏の支配下の安芸の鞆（福山市）に移動して「鞆幕府」を形成して信長の天下布武に抵抗する。三好義継が義理・人情で足利義昭を匿つたことを罪とされ天正元年十一月に義継が妻子と共に自刃する。三好長慶の後の三好宗家が滅亡する。

石山合戦中の天正三年に織田・徳川連合軍が長篠合戦で三〇〇〇挺の三段撃ちで風林火山の武田騎馬軍団を撃破した。これと同時に三好義継の滅亡の後に畿内で三好の名を継承していた三好康長が三ヶ月葉茶壺を献上して高屋城で信長に降伏した。康長は石山本願寺との信頼関係を持つことで信長に重用され

る。天正五年に越後の上杉謙信が上洛軍を起し能登七尾まで怒涛の進撃をする。その威勢に応じて松永久秀が本願寺包圍の天王寺砦から信貴山城に帰還、籠城する。信玄と同様に謙信も上洛しなかった。失望した久秀が信貴山城の天守閣の上で、献上すれば赦免するとされた平蜘蛛の茶釜に爆薬を込めて自爆する。時を同じくして阿波三好家の当主の三好長治が別宮長原で自刃し、康長の子（縁者か？）の三好式部少輔康俊が追腹を切つて殉死する。そのことで土佐の長宗我部元親勢が三好郡に攻め入り三好氏の名の本拠の三好・美馬郡と阿南の海部・那賀郡を支配下に置く。四国・中国・九州でも戦国乱世となり、四国では長宗我部元親が土佐を統一して四国山脈を越えて白地大西城（三好市山城町）を拠城として西讃岐・東伊予を支配下に置き、吉野川を下つて三好氏の芝生城・重清城・岩倉城まで支配下に置く。長宗我部元親と織田信長との間には「四国は切り取り次第」と認められていたが、三好康長の懇望によつて方針が転換され、明智光秀・長宗我部元親の路線から羽柴秀吉・三好康長の路線に転換され、康長が信長の三男の信孝を養子として、天正十（一五八二）年六月三日に信孝を大将・丹羽長秀を副将とする四国

平定軍が岸和田から渡海することとが予定され、平定後は阿波国主に三好康長、讃岐国主に三好（織田）信孝が封ぜられる国分が予定されていた。それが前日の光秀の謀反による本能寺の変で水泡に帰する。

秀吉が毛利氏攻めから大返しをして光秀の十日天下とし、信長の後継者として名乗りを上げて大徳寺で葬儀を挙行し、三好長慶の菩提の聚光院の隣りに信長のために総見院を建立する。

## 中村一氏の登場

天正十年十月十五日大徳寺での葬儀の七日後に、これまでに書いたことに関係しての秀吉の本願寺下間頼廉宛書状があり、中村一氏が登場し、横田内膳との出会いを予測させる。

「就其今度之雜説に根来之事、泉州知行等出入在之由候之条、遂に明為可申付、廿五日、為先勢中村孫平次、伊藤掃部、浅野弥兵衛、若江三人衆、三好孫七郎、同山城守、其外人数差遣候」。中村孫平次は中村一氏、伊藤掃部は伊藤祐時、浅野弥兵衛は長政、三好孫七郎は康長の養子となった秀次、三好山城守は三好康長のこと。一氏が岸和田城主になるより二年前に三好康長らと共に紀州根来への出征。康長を介しての中村一氏と横田内膳の出会いが推測される。